

新成人が昭和史の生き証人に日本のいまを問う

『日本のいちばん長い日』半藤一利×『野火』塚本晋也

成人の日スペシャル『ニッポンの縁側 ～半藤一利とモヤモヤ考える～』

2017年1月9日(月・祝)19:00～19:52 OA!

TOKYO FMでは、1月9日(月・祝)19時から特別番組「成人の日スペシャル『ニッポンの縁側～半藤一利とモヤモヤ考える～』」を放送いたします。スタジオ内に現れた縁側(えんがわ)に腰掛ける半藤一利のもとを、2017年に成人式を迎える3名の新成人と、映画監督 塚本晋也が訪れ、それぞれが様々な質問をぶつけ、「ニッポンの正体」について掘り下げていきます。昭和と「いま」の大人の違いとは? 「憲法改正」をめぐる議論にみられる日本人の曖昧さとは? 放送をどうぞお楽しみに。



■選挙年齢引き下げを体験した2017年の新成人が昭和史の生き証人に問う、大人の定義

スタジオに現れた縁側(えんがわ)に腰掛ける半藤一利。日本中の戦争体験者を取材した半藤一利を最初に訪ねたのは、戦後50年の翌年、1996年に生まれた2017年の新成人たち。選挙年齢引き下げ後初めての選挙を経験し、「大人とは?」という疑問にぶつかったという彼らが、半藤一利に「戦争時代の二十歳(はたち)は現代の二十歳であるわたしたちどう違うのか?」「昭和を経験した半藤さんの考える大人とは?」について尋ねます。半藤一利からは「戦争時代の二十歳は兵隊となる年齢だった。当時は人生が二十年で終わると思っていた人が多いのでは…」と当時のことが語られました。また、すでに戦争を知らない親の元に育った新成人たちが、「憲法改正や平和について」どう感じているのか、半藤一利との対談の中から掘り下げていきます。

新成人たちが半藤一利との対談の中でみつけたものとは…?

■憲法改正論議から見える、日本人の姿とは…?

次に縁側に腰掛ける半藤一利を訪ねたのは、戦後70年にあたる2015年に公開された映画『野火』を手がけた映画監督の塚本晋也。『野火』を制作することを発表した時に、インターネット上で『反日だ!』と言ってきた人がいた。しかし公開後、批判や炎上はなかった」という塚本晋也が、戦争・昭和史を取材し続け、時には批判の声もあったという半藤一利と「戦争を語り継ぐこと」について、対談を通じ考えていきます。今と昔で変化する『戦争』の捉え方とは? 現代の人が持つ戦争のイメージとは?

また、「憲法改正」に関する議論について、「普通ならオブラートに包んで話したい内容。半藤さんが全く歯に衣着せぬ発言をするのが素晴らしいと思った」という塚本晋也に半藤一利が伝えた憲法九条への想いとは…?

1月9日(月・祝)19時からの放送を、どうぞご期待ください。



【半藤一利 プロフィール】

1930年 東京・向島生まれ。

東京大学文学部卒業後、文藝春秋入社。松本清張、司馬遼太郎らの担当編集者をつとめる。

「週刊文春」「文藝春秋」編集長、専務取締役などをへて作家に。

「歴史探偵」を名乗り、近現代史に関する著作を多数発表。

著書は『日本のいちばん長い日』、『聖断—昭和天皇と鈴木貫太郎—』、『漱石先生ぞな、もし』（新田次郎文学賞）、『ノモンハンの夏』（山本七平賞）。『昭和史 1926-1945』『昭和史 戦後篇 1945-1989』で毎日出版文化賞特別賞を受賞。



【塚本晋也 プロフィール】

1960年1月1日、東京・渋谷生まれ。14歳で初めて8ミリカメラを手にする。89年「鉄男」で劇場映画デビューと同時に、ローマ国際ファンタスティック映画祭グランプリ受賞。主な作品に、「東京フィスト」、「バレット・バレー」、「双生児」「六月の蛇」「ヴィターレ」「悪夢探偵」「KOTOKO」「野火」など。製作、監督、脚本、撮影、照明、美術、編集などすべてに関与して作りあげる作品は、国内、海外で数多くの賞を受賞。俳優としても活躍。監督作のほとんどに出演するほか、他監督の作品にも多く出演。「とらばいゆ」「クロエ」「溺れる人」「殺し屋1」で02年毎日映画コンクールほか男優助演賞を受賞。「野火」では同コンクールで男優主演賞を受賞。その他に庵野秀明「シン・ゴジラ」、マーティン・スコセッシ監督「沈黙—サイレンス—」など。

【新成人3名】

阪神淡路大震災の翌年である、米アトランタ五輪開催「コギャル」「ルーズソックス」「プリクラ」が大ヒットした1996年から、消費税が5%となり、山一證券が破綻した1997年に生まれたのが、2017年の新成人。ゆとり世代の最後期にあたり、小学校6年生の時にリーマンショックを経験、中学校卒業間際に東日本大震災を経験。IT産業の成長期、携帯電話やPC、ゲームをはじめIT機器分野で新しいものが次々に生まれる環境に育ち、2016年の選挙年齢の引き下げにより、20歳未満での選挙を経験した世代。



藤川拓哉

(東洋大学 社会学部社会学科 ゼミで犯罪社会学を専攻)



篠原梨菜

(東京大学 教養学部文科三類 法学部第二類内定 2016年度ミス東大グランプリ)



森岡真葵子

(中央大学 経済学部国際経済学科 フィリピンで日本語教育に携わる)

【若者へのアンケートより一部抜粋】

※番組制作にあたり、若者を対象に、今の日本について・「大人」について・今や将来についてどう感じているかのアンケートを行いました。(放送で呼びかけ、TOKYO FM 特設ページにて実施。)

Q. 20歳は大人だと思うか？

A. ■思う56% ■思わない44%



- 思う。働き始めて実感した。周りもそう扱う。(20歳 男性 社会人)
- 思わない。「自分の力で生計を立てられる人が大人」(22歳 男性 学生)
- 思う。20歳にもなれば、他人の力を借りながらも自分のことは自分で決めるだけの人脈と経験はある(22歳 女性 学生)
- 思わない。外国と違い、学費を親に払ってもらっている。労働者にしても稚拙な人が多い(33歳 男性 社会人)

Q. 今、現状の生活に満足しているか？

A. ■満足63% ■不満27%



- 満足。特に不満なことがない(18歳 男性 学生)
- 満足。好きなこと、もっと知りたいと思うことがある(19歳 女性 学生)
- 不満。未来に不安なことが多すぎる。経済面や環境、戦争の謝罪など、大人たちが残したものが多。(19歳 男性 学生)
- 満足。4年間大学に通わせてもらっているし、自身の好きなことを勉強しているから(20歳 男性 学生)

Q. 将来についてどう思うか？

A. ■明るい31% ■不安69%



- 明るい。このまま楽しく生活できればいいかな、と思う(21歳 女性 学生)
- 不安だ。単に明るいと思えることがない。(19歳 男性 学生)
- 不安だ。人口減・経済の衰退で日本はゆっくり死んでいくと考えているため(20歳 男性 学生)
- 不安だ。トランプ大統領の就任で、世界中で内向的な考え方や主張が台頭しそう(22歳 男性 学生)
- 明るい。この先どんな困難な状況になっても楽しみながらやって行きたいと思うし、そうできると信じている。(19歳 女性 学生)

Q. 「憲法改正論議」に興味があるか？

A. ■関心がある63% ■関心はない9% ■分からない28%



- ある。9条が変わってしまう可能性があるため(22歳 男性 学生)
- ある。結局のところ何がどう問題なのか分かっていないので知りたい(20歳 女性 学生)
- ある。いろいろな議論があるが、改正してかえって権利が奪われる危険もある(21歳 女性 学生)
- ある。「日本」という国の根本であり、どのように変わり、変化を世の中にもたらすのか興味がある(15歳 男性 学生)
- ある。70年近くに渡り、国政が1つの文章に振り回されているのはおかしい(20歳 男性 学生)
- ない。時代の変化とともに、時代のルールも適切に変えていくべきだと思うから(20歳 男性 学生)

Q. 憲法改正した方が良いか？

A. ■した方がよい56% ■しない方がよい16% ■分からない28%



- した方がよい。日本ほど憲法を改正していない国も珍しい。その時代にあった憲法こそすべき(19歳 男性 学生)
- した方がよい。少子高齢化やLGBTの問題など、憲法制定当時の社会状況から予想できなかった変化や当時軽視されていた議論があり、現代の状況とみあっていない(21歳 女性 学生)
- わからない。今それをすべきなのかは分からないが、いずれすべきだとは思。戦後70年が経ち、時代は常に変化している。戦争を知らないわたしたちが、過去の教訓に学び、平和的な憲法を制定することが必要だと思う(19歳 女性 学生)
- しなくてよい。日本の平和憲法は世界的にも高く評価されているし、改正の余地はない(20歳 男性 学生)
- わからない。ものによると思う。ただ戦争のできる国にはなってほしくないと思う。(21歳 女性 学生)

【番組概要】

◆タイトル: 成人の日スペシャル 「ニッポンの縁側 ～半藤一利とモヤモヤ考える～」

◆放送日時: 1月9日(月・祝)19:00～19:52

◆放送局: TOKYO FM

◆出演者: 半藤一利、塚本晋也、薩川拓哉(大学生)、篠原梨菜(大学生)、森岡真葵子(大学生)